



一令和元年 6月20日発行一

公益財団法人 古代学協会だより



左：臘谷寿助教授、中：天皇陛下（当時は徳仁親王殿下）、右：角田館長

左：臘谷寿助教授、中：天皇陛下（当時は徳仁親王殿下）、右：角田館長
陛下は学習院大学文学部史学科と同大学院人文科学研究科博士前期課程で日本中世史を専攻されるとともに、オックス

本年五月一日、皇太子徳仁親王が新しい天皇として即位され、同時に元号が「令和」と改められた。新天皇は、中世史を専門とする歴史学者でもある。

陛下は学習院大学文学部史学科と同大学院人文科学研究科博士前期課程で日本中世史を専

イギリスの水運史について研究を深められ、日欧双方の歴史について数々の論文や著書を公刊されているのである。陛下御

天皇陛下は学習院大学在学中の昭和五十五年三月、古代学協会の平安博物館にお越しになつたことがある。この時、陛下は

学習院大学の古記録研究会研修旅行で二十名の学友と共に京都を訪れられたのである。三月十五日午前十時十五分に京都駅に着かれた陛下御一行は、そのまま宮内庁京都事務所に入られ、ここで平安博物館館長（当時）の角田文衛博士から約一時間に亘つて平安京の構成や沿革、また主な院宮邸宅の位置や里内裏についての説明

大学マードン・カレッジに留学して

（つづく）

新天皇陛下と古代学協会

フォード

大学マード

トン・カ

レッジに

をお聞きになった。この後、角田館長や宇土條治宮内庁京都事務所長（当時）の案内で、京都御所内の紫宸殿や清涼殿、さら

に大宮御所や仙洞御所などを見学になられた。そして、十九日午前九時五十五分に平安博物館を訪問されたのである。陛下御一行は、角田館長、臘谷寿司館長（現・同志社女子大学名誉教授、当協会理事長）を案内役として展示室を見学された。さらに十一時からは平安博物館会議室において当協会所蔵の平安時代の古文書や、後白河法皇の御所である法住寺殿址から出土した遺物を閲覧され、角田館長、臘谷助教授、藤本孝一講師（現・当協会客員研究員）、寺島孝一講師（後、東京大学准教授）の解説に興味深く耳を傾けられたのであつた。

皇室は代々、学問を大切にしてこられた。陛下の大祖父にあたられる故・三笠宮崇仁親王殿下は古代オリエント史の専門家であり、当協会においても名譽顧問を永く務めていた。新天皇の即位を寿ぐとともに、切にする時代となることを願っている。



図3 遺跡を訪れたタンザニアの生徒と筆者

活発に行われた地域で、多くの物資とともに中国や東南アジアの陶磁器も運ばれた。チツック教授が住んだ廃墟となつた家の前の砂浜には、波で洗われた陶磁器片が石ころに混じつて散在している。龍泉窯の青磁碗や景德鎮の染付などのに、ミヤンマー産の青磁大盤の高台部片も落ちていた。ミヤンマー青磁はアラビア半島の十四世紀から十六世紀の遺跡で、一般的に見られる大量流通品である。カイロのフスタート遺跡やアラブ首長国連邦のジユルファール遺跡、ハレイラ島遺跡、コールファッカーン遺跡、ディバ遺跡など各地でかなりの量を私は発掘したが、オマーンやイエメンでも多くの遺跡の地表面で容易に見ることができた。それと同じ種類がキルワ島の海岸に



図4 キルワ島の宮殿建築

も落ちていた。インド洋貿易で広範に流通したと推定させる資料の一つとなる。この種類の陶磁器は、エジプトやアラビア半島の遺跡では二十世紀末までタイ陶磁器と分類していたが、二十一世紀初めに私たちがミヤンマー産であることを発見した。思い出深い種類の青磁を拾うことができたのは、今回のタンザニア訪問の嬉しい収穫の一つである。

タンザニア

(当協会理事)

タンザニア北部には最古のホモ属であるホモ・サピリスが発見されたオルドヴァイ渓谷、東北部にはアフリカ最高峰のキリマンジャロ、北部にアフリカ最大のビクトリア湖がある。十八世紀には根付けの材料として、日本との象牙貿易が確立。十九世紀末にドイツ領となり、英国资任統治領を経て、一九六四年大陸側タンザニア連合共和国成立。

翌日の関西方面の新聞記



タンザニアでインド洋貿易の歴史を見る

—装飾品としての中国や日本の陶磁器—

金沢大学名誉教授 佐々木達夫

二〇一八年夏、アラビア半島でタンザニア人らと遺跡を発掘していた途中に、長崎大学野上建紀教授の科研費調査でインド洋に面する東アフリカのタンザニアを訪ねた。赤道直下の海岸町は、当時の日本の猛暑や五十度近いアラビア半島と比べれば涼しく、しかも乾季のため調査旅行に適していた。

大都市は世界中で共通性が見られるが、地方の農村や漁村は地域ごとに特色がある。地元で育つ木の幹や枝を組合せ、間に泥を塗り込め、表面を石灰で塗る。この家が遺跡になると、室内に残るのは鍋を置く三個の小石と灰のみであろう。いつも同じような状態の遺跡を発掘しているから、



図1 キルワ島の石造り墓

たいへん親近感を感じた。

首都ダルエスサラームから車で七時間ほど南に下ると、世界遺産のキルワ島の対岸町キルワ・マソコに着く。そこからボートでキルワ島に渡る。九世紀からペルシア商人も来航して居住地とし、十三世紀には大きな建築群が建設され、十五世紀には

インド洋アフリカ沿岸の最大規模のポルトガル支配などを経て衰退し、ついで壁と天井を作った家が、赤い砂の上の小さな村内に点在している。人が支配した十五世紀は、その頃の繁栄の様相を彷彿とさせる大宮殿やモスクの巨大建築遺跡が島内に残っている。モスク近くには墓地もあるが、外した数点の陶磁器が展示され、壁に貼り付けられた状態の写真パネルもある。壁の装飾に陶磁器を用いる地域文化であったことを示している。

ケンブリッジ大学のチツック教授は一九五八年から一九六五年にキルワ島の大規模発掘を実施した。当時、彼が居住した家も廃虚状態で残っている。一九七〇年代に発掘報告書全二冊が刊行され、建築壁跡に貼り付けられた陶磁器も紹介された。大学院生であった私もその高価な報告書を購入した。中国の青磁や染付の碗や皿が目立つようであるが、イランの青釉黒彩陶器や緑釉陶器、あるいは白釉青彩の染付写し陶器も使われたことが、壁に残る小さな破片から推定できる。日本の伊万里焼もスルタン墓を囲む石壁に一点貼り付けられていたと報告書に記される。十七

世紀後半の有田芙蓉手大皿である。白い素地に青色で文様を描いた染付は、室内装飾用に各地で好まれた種類であった。

中世の大建物跡、とくにモスク壁や天井、支配層の墓壁に陶磁器を貼り付ける風習は、ダルエスサラームやその北方の町バガモヨ、南方のキルワなどタンザニア各地に存在していた。広範囲の文化圏に共通する建築装飾方法である。イランは装飾タイルが広く建築で使用されたが、アラビア半島はタイル装飾の文化が南北アジアとも共通性を示す一つの例である。インド洋貿易がもたらした大型木造帆船によるインド洋貿易が



図2 墓壁に貼り付けられた中国染付の小片

歴史ニュースを読み解く

大山古墳（仁徳天皇陵古墳、大阪府堺市所在）の限定公開

平成三十一年十一月二十二日、大山古墳（仁徳天皇陵古墳）の事前調査の限定公開に、陵墓関係十六学・協会の一員として当協会からも三名が参加した。

「陵墓関係十六学・協会」とは、一九六七年日本考古学協会を中心とする歴史学・考古学の十一の学会が

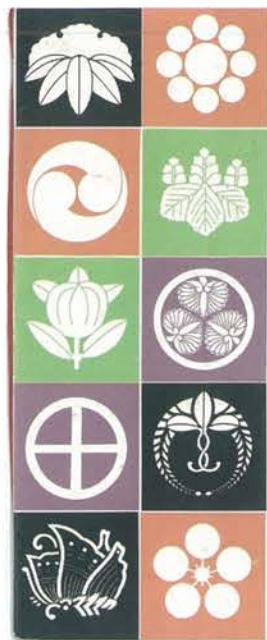
共同して、宮内庁に対しても陵墓公開の折衝をするための組織として出発し、その後これに加わる学会が増加した学会の連合組織である。

宮内庁との地道な折衝と学会との相互理解で、近年は年二回程度の「立ち入り見学」が行われている。しかし今回は注目が集まり、研究者だけでなく一般にも関心が非常に高く、当日は十六学協会から四十三名の研究者、宮内庁、多くのマスコミ、上空にはヘリコプターが飛ぶという状態であつた。

タンザニア北部には最古のホモ属であるホモ・サピリスが発見されたオルドヴァイ渓谷、東北部にはアフリカ最高峰のキリマンジャロ、北部にアフリカ最大のビクトリア湖がある。十八世紀には根付けの材料として、日本との象牙貿易が確立。十九世紀末にドイツ領となり、英国资任統治領を経て、一九六四年大陸側タンザニア連合共和国成立。

翌日の関西方面の新聞記





Souvenir
Passenger List

L.L. "KASHIMA MARU"
N.Y.K. LINE

なつてしまふが、いっぽうで身近なもの、近寄りやすいものとして捉えられていることは、注目すべきである。

縄文にかんするものに限らず、研究者による専門書以外で実際に様々な書籍やテレビ番組が衆目に触れている。その中身は玉石混淆だが、一般的なライターが執筆した書籍で監修者見渡せば、一過性のブームというよりは本来一般の方がもたれている興味が、表面に出てきただけのようにも感じる。展覧会会期中、興味深い意見が聞かれた。「ほかの分野の展覧会だと、教養が必要だつたり、知らないと恥ずかしいようなものもあるが、考古の展覧会なら自由に見られて楽しい」というようなものである。一般的の意見としては、どう

る来場者を迎えた。わずか二ヶ月の展覧会期間直後には、五万部刷られた図録は品切れとなり、日本考古学の書籍としては驚異的な売れ行きとなつた。

いわゆる「縄文ブーム」という語を耳にするようになつて久しい。しかしブームや流行は作られるものであるし、むしろ「縄文」展の会場を見渡せば、一過性のブームというよりは本来一般の方がもたれている興味が、表面に出てきただけのようにも感じる。展覧会会期中、興味深い意見が聞かれた。「ほかの分野の展覧会だと、教養が必要だつたり、知らないと恥ずかしいようなものもあるが、考古の展覧会なら自由に見られて楽しい」というようなものである。一般的の意見としては、どう



東京国立博物館 山本 亮

縄文「ブーム」と情報発信

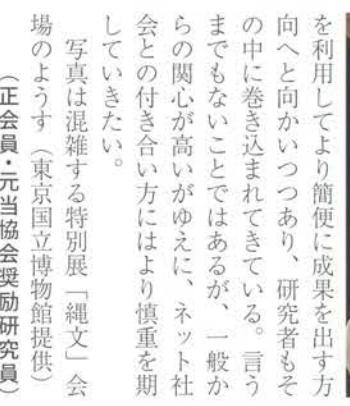
しても他の美術展を含めた展覧会全體を比較しての意見が多く見が多くの美術展で断片的で根拠のない情報が実際に博したもの、こうした傾向から共感を得てのことであろう。

このような情報が洪水のようにあふれている中では、一般の方々に正しい情報の取捨選択を期待することは難しさを増している。もはや一般の方々の情報源はほとんどインターネットによっており、「本当に正確な情報を得たいと思うなら研究者が著した書籍にあたるだろ」と、タカをくくってはいられない。誤った情報に基づいて、本の内容や博物館の展示の改善を求める意見も今後増えていくだろう。ネット社会では誰しもが自由な意見と表現を広く公開できるようになり、そこには論文には書かないようなことを軽い気持ちで書いているのだろうが、研究者が匿名で書いたものが混ざつてたりする。また理系に限らず、人文科学の論文でも引用率が高いものは内容の如何にかかわらずネットで公開されているものが多数となつてきているように、世の中はネット



が付いていないにもかかわらず完成度が高いものもある。またネット上では断片的で根拠のない情報が実際に博したもの、こうした傾向から共感を得てのことであろう。

このような情報が洪水のようにあふれている中では、一般の方々に正しい情報の取捨選択を期待することは難しさを増している。もはや一般の方々の情報源はほとんどインターネットによっており、「本当に正確な情報を得たいと思うなら研究者が著した書籍にあたるだろ」と、タカをくくってはいられない。誤った情報に基づいて、本の内容や博物館の展示の改善を求める意見も今後増えていくだろう。ネット社会では誰しもが自由な意見と表現を広く公開できるようになり、そこには論文には書かないようなことを軽い気持ちで書いているのだろうが、研究者が匿名で書いたものが混ざつてたりする。また理系に限らず、人文科学の論文でも引用率が高いものは内容の如何にかかわらずネットで公開されているものが多数となつてきているように、世の中はネット



【土車】（つちぐるま）とは
「六角堂縁起」によると、当協会の所在地である三条高倉辺一帯は、愛宕郡折田郷土車里と呼ばれていたという。平安京遷都以来この地名はなくなつてしまつたが、本誌名はこの名をとつたものである。

角田文衛贈資料の中に、角田先生が一九三九年（昭和十四年）第2回日伊交換留学生として訪欧した際に乗船した日本郵船の貨客船、鹿島丸の乗船名簿が残されている。日本郵船歴史博物館によるところ、戦前に日本と海外を結んだ客船では航海ごとにこうした乗船名簿が作成され、乗客に配布された。当時、横浜からロンドンまで航海は約五十日に及んだ。道中、乗客表紙には Souvenir と印刷してある。乗客が記念に持ち帰るために、船会社は保管しておらず現存数は少ないという。鹿島丸の乗船名簿も同博物館が所蔵するものは別の二航海分のみ。当資料が確認された三例目だそうだ。

角田先生が乗船した鹿島丸は横浜を七月十六日に出港。上海やサイゴン、シンガポール、コロンボなどを経てスエズ運河を抜け、ナポリ、マルセイユ、ジブラルタル等に寄港しロンドンへと向かつた。目的地であるナポリまで寄港地で下船しては街を探索し、船上では思索にふけり、イタリア語の習得に励んだ、と記している。

角田先生は予定通り一年間の留学

角田文衛贈資料の中には、角田先生が一九三九年（昭和十四年）第2回日伊交換留学生として訪欧した際に乗船した日本郵船の貨客船、鹿島丸の乗船名簿が残されている。日本郵船歴史博物館によるところ、戦前に日本と海外を結んだ客船では航海ごとにこうした乗船名簿が作成され、乗客に配布された。当時、横浜からロンドンまで航海は約五十日に及んだ。道中、乗客表紙には Souvenir と印刷してある。乗客が記念に持ち帰るために、船会社は保管しておらず現存数は少ないという。鹿島丸の乗船名簿も同博物館が所蔵するものは別の二航海分のみ。当資料が確認された三例目だそうだ。

角田先生が乗船した鹿島丸は横浜を七月十六日に出港。上海やサイゴン、シンガポール、コロンボなどを経てスエズ運河を抜け、ナポリ、マルセイユ、ジブラルタル等に寄港しロンドンへと向かつた。目的地であるナポリまで寄港地で下船しては街を探索し、船上では思索にふけり、イタリア語の習得に励んだ、と記している。

角田先生は予定通り一年間の留学

期間を全うした後ソ連の通過ビザを入手し、トルコなど中立国を経てシベリア鉄道を使って一九四二年六月無事帰国した。（日本郵船歴史博物館の堀江誠様、小川友季様のご協力ご教示に感謝します）

出版だより

『角田文衛の古代学』 第二卷 —王朝の余芳—

第三回配本となる本巻は、角田文衛博士の研究分野の中でも王朝を舞台とした論攷を集成了したものである。中でも本巻の約半分を占める、王朝政治のなかにおける高階家の存在に光をあてた「高階家の悲劇」は圧巻である。角田博士の言葉を借りると「六世紀間の歴史を眺めて痛感するのは、度重なる悲劇にも屈せず、如何に高階の人びとが青白い権勢欲の炎を燃やし続けたか」ということである。彼らは謂わば火山脈のようなもので、地殻にいささかでも隙間があれば噴出して、絶えず地底で青白い溶岩をたぎらせていたのである。」といつた導入の文章から窺えるように、研究論文でありながら歴史の世界に私たちをぐいぐい引きずりこむ。詮ないことながら未完であることが残念至極である。

他にも人物史、歴史と遺跡に関する論攷、博士独自の歴史観を披露した論攷など多彩な内容となっている。構成は下記の通り。

第二卷 王朝の余芳

第一部 高階家の悲劇

第二部 王朝の人々
平安王朝のヒメと恋／天応の変／藤原有佐の母／白河法皇の死亡原因について／後白河院の近臣／修明門院

第三部 王朝史の舞台 ／四条家略記

久邇京と泉州／鳥辺野のあたり／清少納言と平安京／三条南殿の沿革／御子左家／三条姉小路方面の大火／平泉と平安京——藤原三代の外交政

第四部 史料と史観 ／第一／平安時代の福島地方

十六日付「廣湍秋麻呂水田立券文写」／仁和寺研究の展望／冷泉家のひととー秘庫の開扉にあたつてー／絶滅史観に立脚して歴史の再検討

次回第四回配本・第3巻「ヨーロッパ古代史の再構成」にて完結。

古代学協会研究報告 第十五輯 『角田文衛博士遺贈資料 —書簡集—』

A4判、本文三十頁、表一八〇頁、
図版十五頁（予定）

令和元年八月末刊行予定
編集・星野達雄・平田健

令和元年八月末刊行予定
（公財）古代学協会公開講演会

A4判、本文三十頁、表一八〇頁、
図版十五頁（予定）

令和元年八月末刊行予定
（公財）古代学協会公開講演会

講演会のご案内

令和元年度第一回
（公財）古代学協会公開講演会

